



商工融合による地域連携探究 —マイスターハイスクールの取り組み—

福井県立武生商工高等学校教諭 金光 日穂里

1. はじめに

福井県立武生商工高校は、2020年の武生商業・武生工業両校の統合を経て、2025年度より待望のワンキャンパス化を果たした総合産業高校である。2024年度からは「マイスター・ハイスクール普及促進事業」の拠点校となり、地域産業界や高等教育機関と密接に連携した最先端の職業人材育成に取り組んでいる。本校の最大の強みは、商業の「ビジネスの視点」と工業の「ものづくりの精神」を同一環境であわせ持つ点にある。単なる専門知識の習得に留まらず、地域と連携した実践的な学びから、主体的な行動力や問題解決能力、多様な人との協働力といった「社会人としての力」の養成を重視している。

卒業生の約7割が就職を選択し、その大半が地元県内に就職する本校にとって、伝統工芸から先端産業までが集積する丹南地域は絶好の学びの場である。この恵まれた環境を活かし、生徒が地域の未来を自分事として捉え、社会で活躍する具体的な将来像を描けるようなキャリア教育を推進している。地域産業の持続的成長を牽引する人材の育成を目指し、学科の枠を超えた連携や探究学習など、専門高校の特性を最大限に生かした教育を展開している。

2. 新たな「課題探究」の設置

これまで本校の「課題研究」は3年次のみの実施であったが、期間の制約から十分な探究活動が困難であるという課題を抱えていた。そこでキャンパス統合を機に、2年次から開始するカリキュラムへと刷新した。あえて「総合的な探究の時間」ではなく「課題研究」として実施するのは、専門性の深化を重視したためである。生徒が自らの専門分野を軸に

据えつつ、他分野との接点を見出し、実社会の課題解決に取り組むことで、より実効性の高い学びが可能になると考えている。

2024年8月、商業科・工業科の教員5名による検討委員会を立ち上げ、以下の2点を軸に2年次「課題研究」のカリキュラム開発をスタートさせた。

①地元への誇りと愛着の醸成

卒業後に地元企業へ就職する生徒が多い本校の特性を踏まえ、地域の即戦力として、また地域を大切に想う人材を育成することを目指した。コーディネーターの協力のもと、地域企業から実在するテーマの提供を受け、生徒が自ら問いを立てて解決策を模索する授業展開を構築した。

②専門性の融合による価値創造

実社会の企業運営では、商業と工業の分野が融合して価値を生んでいる。両科を併設する本校の強みを活かし、商業科の「ビジネスの視点」と工業科の「ものづくりの技術」を組み合わせる学びの場を創出した。他分野の知識・技術を応用できる力を養い、新鮮なアイデアの創出に挑戦させるのが狙いである。

本校の課題研究が大切にしているのは、正解のない問いに対し、仲間とともに試行錯誤を重ねて新たな発見を積み重ねる「過程そのもの」の価値である。年間の流れは、探究の基本プロセスを繰り返し体験できるよう設計した。2年生の1学期は企業テーマに基づく「個人での課題解決学習」、2学期は学科の枠を超えた「商工混合のグループ学習」、3学期はこれらを踏まえた「3年次への継続学習」を行う。年間を通じて個人とグループの協働を組み合わせることで、学びをより豊かで実践的なものへと高めている。

3. 1学期（個人での課題解決学習）

(1) 企業テーマの提案

検討委員会は産学連携コーディネーター等を通じ、商業・工業両科の専門性を活かせる県内企業4社を調整した。4月、生徒の課題解決学習の核となる以下のテーマが企業側より提案された。



上屋敷工業（株）：地域の特色を出した、SNS 映える今までにない公園施設の提案



(株) ワカヤマ：特殊塗装技術「ニンジャコート」を用いた、伝統工芸の魅力向上策



(株) 増田空調：「快適」とは何かを子どもや就活生に伝える手法の検討



こしの都ネットワーク（株）：若者をターゲットにした地域の魅力発信と活性化

(2) 個人による仮説構築と課題解決発表

生徒はプレストシートを用い、個人で仮説や具体案を考察しスライドを作成した。6月の発表会には企業担当者が来校し、生徒の柔軟な発想を直接見学した。

【生徒発表の例】

- ・上屋敷工業（株）：訪れる人の色を引き立たせる「白黒の遊具」や、地域特産品を隠し要素として取り入れたデザインの提案。
- ・(株) ワカヤマ：飲食店で普及する紙ストローに越前和紙を用い、ニンジャコートで防水加工を施した環境・人体に優しい商品の提案。

4. 2学期（商工混合のグループ学習）

(1) ミーティングによるテーマの見直し

1学期終了時の振り返りでは、企業から「生徒との交流機会の充実」や「絞り込んだテーマ設定」を求める声が上がった。これを踏まえ、2学期からは月2回「課題解決サポーター」として企業担当者を招き、伴走支援を開始した。また、生徒が課題を絞り込み、より具現化しやすいようテーマを再定義した。

企業名	1学期の振り返り・課題	2学期の見直し後
上屋敷工業	特産物の活用が多角的すぎたため、地域と対象を限定したい	地域を限定した SNS 映える遊具または施設（ベンチ等）
ワカヤマ	ニンジャコートと伝統工芸の結びつきが弱かった	カラフルな特殊加工「ピンクニンジャ」に絞った商品提案
増田空調	「当たり前前の快適さ」を伝える重要性を再確認したい	(変更なし) 「快適とは？」
こしの都ネット	発信手段が多様化したため、地域の歴史・文化を伝える「映像」に絞りたい	丹南地区の宝物（歴史等）を探し出し、映像で PR する

テーマを絞ることで課題は明確化したが、一方でアイデアの自由度が下がる懸念も生じた。産学連携コーディネーターからの「失敗を恐れず、今までにないことに挑戦させてほしい」といった助言を受け、3年次の課題研究での具現化（商工協働）を見据えて、連携企業との伴走体制を強化した。

(2) 商工混合のグループ学習

2学期は専門分野を越えた学習を目的とし、テ

まごとに商工混合クラスを編成してグループでの課題解決学習を実施した。指導体制も、1学期の自科担当2名から商業科・工業科の教員各1名による複数指導へと変更した。初対面の生徒らはアイズプレイクを経て活動を開始したが、週1回という授業頻度の制約から、活動の継続性やエンジンがかかるまでの時間に課題を残した。しかし生徒からは、「積極的に対話することで良い考えが生まれる」「専門性の融合により新たな視点が得られた」といった、他者との協働や統合校ならではの利点を実感する声が多く上がった。

11月上旬には学習の質を高めるべく中間相談会を開催した。福井県探究コーディネーターを介して招いた相談役との対話を通じ、活動の方向性を明確化できた班がある一方、テーマへの不適合を指摘され白紙に戻る班も現れるなど、外部からの客観的な意見は研究内容を深化・改善させる貴重な機会となった。また教員にとっても、専門的な知見を持つ相談役と生徒の関わりを観察することで、声掛けや問い掛け等の支援スキルを学び、探究的な学びを支える伴走者としての指導力を向上させる契機となった。生徒はこれらの助言を糧に内容のブラッシュアップを重ね、12月中旬の課題研究発表会にて堂々と成果を披露した。

5. 3学期（3年次課題研究への継続学習）

3年次の課題研究は、各科の専門知識や技術の深化・統合を図る学習である。2026年度からはこれまでの形態を刷新し、2年次に連携企業と取り組んだ課題解決を継続し、その「具現化」をテーマに組み込んだ。3学期は、企業から発表会の講評を受け、全16グループの提案から実現可能性の高い数案を企業側が継続事業として選定・提案する。生徒はこれを受け、次年度に取り組む具体的な課題を設定し、レポートにまとめる。この一連の流れを通じ、2年次の発想を3年次で形にする、より実践的な学びへと繋げていく。

6. 生徒に身につけさせたい資質・能力

(1) 「商工スキル」について

本校のカリキュラム・ポリシー（特色ある教育課程）では、商業と工業の2つの学科を有する特色を活かし、実践的で社会に役立つスキルを身につけるために、「基礎学力」と「社会人基礎力」の習得を掲げている。検討委員会では、社会人基礎力の3つの能力（12の要素）をベースに、本授業の軸とする地元への誇り、愛着を持つことを目的とした「地域理解力」、専門性の融合に向けた学びの深化を目的とした「専門性」を設定し、「商工スキル」という本校オリジナルのルーブリックを策定した。4月のオリエンテーションで生徒に本スキルの説明を行い、毎時間の授業で身につけてほしい要素を指示するとともに、終了時には振り返りフォームを用いた自己評価を実施し、成長の可視化を図っている。

(2) 「1学期に身につけたスキル」と「2学期に身につけたいスキル」

1学期終了時の調査では、身につけたスキルとして「創造力」「地域理解力」「発信力」が上位を占めた。個人による課題解決学習が主であったため、「主体性」などの実感は低かったが、2学期の商工混合のグループ学習に向け、仲間とともに課題解決に取り組みたいという意欲から、「発信力」や「専門性」を高めたいとする回答が急増した。

生徒からは、「企業のテーマを分析することで、なぜそれが課題なのかを考える課題発見力が身についた」との声や、「相手が話しやすいよう相槌を打つ傾聴力を意識した」との振り返りがあった。また、地域理解力についても「地域とのコラボを考える際、自分の住む地域について知らないことが多く恥ずかしいと感じた。もっと地域を大事にしていきたい。」といった、地元就職を控えた当事者意識の芽生えが確認された。

(3) 「2学期に身につけたスキル」と「今後身につけたいスキル」

2学期終了後の振り返りでは、「発信力」「創造力」「課題発見力」「傾聴力」が上位となり、グループ学習を通じて他者と関わるスキルへの成長実感が示された。生徒は、「誰が聞いても理解できる発表を試行錯誤したことで、相互理解を図るための発信力が身についた」や、「意見の違いを否定せず受け入れ、

新しい考えを生み出す柔軟性が身についた」と自らの変化を肯定的に捉えている。

今後身につけたいスキルについては、自分の意見を整理し伝える「発信力」、目的を深掘りし新たな価値を追求する「創造力」、周囲を早期から巻き込み成果を最大化する「働きかけ力」の向上を望む声が上がった。これらは商工混合のグループ学習や企業との対話を経て、独力での限界とチームによる相乗効果の重要性を痛感した結果である。生徒たちは3年次の具現化フェーズを見据え、社会で通用する実践的な資質・能力の伸長に強い意欲を示している。

	1学期に身につけたスキル	2学期に身につけたいスキル	2学期に身につけたスキル	今後身につけたいスキル
1	創造力	発信力	発信力	発信力
2	地域理解力	創造力	創造力	創造力
3	発信力	専門性	課題発見力	主体性
4	課題発見力	計画力	傾聴力	専門性
5	傾聴力	課題発見力	主体性	実行力
6	計画性	主体性	柔軟性	地域理解力
7	柔軟性	地域理解力	地域理解力	働きかけ力
8	専門性	実行力	計画力	課題発見力
9	実行力	柔軟性	専門性	計画力
10	主体性	状況把握力	実行力	柔軟性
11	状況把握力	傾聴力	状況把握力	傾聴力
12	ストレスコントロール力	働きかけ力	規律性	状況把握力
13	規律性	ストレスコントロール力	働きかけ力	ストレスコントロール力
14	働きかけ力	規律性	ストレスコントロール力	規律性

7. 生徒、教員の学びの場として

探究的な学習を通して、生徒だけでなく教員も「学び合う関係」の中で成長することを重視している。その一環として、2025年5月に仁愛大学の西出和彦教授を招き、「教員対象課題研究研修会」を開催した。本校および県内の商業科教員が参加したこの研修では、課題研究における問いや仮説の立て方を学んだ後、実際に企業から2年生へ提案されたテーマを用いた課題解決に取り組んだ。教員自身が専門分野を越え、未知の課題に対して仲間と対話を深める経験は、探究の楽しさや協働の意義を再確認し、主体的な指導姿勢を育む貴重な機会となった。

8. 企業連携体制構築にむけて

本校が推進する企業連携は、地域産業と学校双方がともに成長できる持続可能なモデルを目指している。企業と学校が双方向で課題を共有し、ともに方向性を検討する姿勢を重視する背景には、現代の「VUCA」や「BANI」に象徴される不確実な社会情勢がある。生徒が自分らしく Well-being を実感しながら社会で活躍するためには、高校時代から地域社会という実践的なフィールドで学ぶことが不可欠である。正解のない問いに主体的に取り組む探究学習こそが、急激な社会変化に対応する力を効果的に育むからである。

2年次の「課題研究」では、地域企業から提供された実社会の課題をテーマに据えている。生徒は自身の専門知識を基盤としつつ、現実の困難に向き合うプロセスを通じて、協働的・創造的な課題解決能力を養っている。こうした学びは、知識等の認知的側面のみならず、主体性や自己効力感といった非認知能力の育成にも大きく寄与している。また、企業側にとっても、地域貢献に留まらず、自社PRや外部視点の獲得、新たな価値創出の契機となるなど、教育と産業界が「Win-Win」の関係を築くことが可能となっている。

本校の取り組みは、次期学習指導要領が目指す方向性である「学科横断的な学びの推進」や「産業界との連携強化」を先取りするものでもある。専門高校において分野を越えた融合と地域連携の重要性が今後ますます高まるであろう中、本校の課題研究はその先駆的なモデルとなり得ると考えている。今後も専門高校の特性を最大限に生かし、地域と連携した持続可能な教育のあり方を模索し、実践を積み重ねていきたい。

